

『為_二空也上人_一供_二養金字大般若經_一願文』再考

石 井 義 長

一〇世紀の平安時代中前期にわが国で初めて称名の念仏を市中に勧化し、同時代人の慶滋保胤から『日本往生極樂記』に、「爾後奉_レ世念仏為_レ事。誠是上人化度衆生之力也」と讃えられた空也（九〇三―九七二）は、六一歳の応和三年（九六三）八月二三日、かの応和の宗論が宮中で闘わされていた当日に、鴨川西岸で盛大な金字大般若經の供養会を催した。そこで読み上げられたのが、空也が三善道統に書かせた『為_二空也上人_一供_二養金字大般若經_一願文』（『本朝文粹』卷十三）であり、

それは他に殆んど述作を残していない市井の阿弥陀聖の仏教思想を伝える貴重な資料である。従来その内容について詳細に読解し、そこに示された空也の仏教思想を正しく理解した研究例は皆無と思われるが、これを読み解いていくと、そこからは『大般若經』第三九八卷から第四〇〇卷にわたる「常啼菩薩品」と「法涌菩薩品」の經説を、空也が正確に把握したうえで、自身も大乘菩薩僧として般若波羅蜜多を常啼菩薩のように不惜身命の努力で学びとり、これを一切衆生の利樂

のために開示すると同時に、写經や念仏等の功德によって結縁者に上品上生の往生を廻向しようとする大悲心が、鮮やかに浮かび上がってくる。それは、これまで呪術的・民俗的念仏者としておとしめられていた空也を、大乘菩薩行の実踐者としての正統な位置に正しく据え直すことを求めるものである。

一 『大般若經』の選択と願意

玄奘訳『大般若波羅蜜多經』六百卷（以下『經』と表記）は仏智を集大成した最大の經典として尊重され、奈良時代以前から国土安泰・五穀豊穰・追善・病氣平癒等のためしばしば書写・読誦されている。空也もまた疫病と災害に苦しむ人々の救いと鎮魂のため、天曆四年（九五〇）に貴賤上下に知識勸進して書写事業を始め、同時に行った十一面觀音・梵天・帝釈・四天王の造像は翌年に完成したが、写經にはさらに延べ一四年の歳月をかけ、紫紙金泥に水晶の軸・雲母の帙とい

う華麗な裝飾経を完成した。それは供養会が鴨川原に仏殿を仮設して六百人の高僧を招き、伎楽を奏して説法や万灯会・菩薩戒授戒等を行ったこととあわせて、『経』が「若善男子善女人等。書此般若波羅蜜多。種種莊嚴受持誦誦。復以種種上妙花鬘乃至灯明供養恭敬尊重讚歎。則為供養一切智智。及所依止仏相好身」^①と説いている教えに、忠実に従おうとしたものと考えられる。

空也は没後まもなく書かれた源為憲の『空也上人誄』によれば、二〇歳すぎて尾張国分寺で沙弥出家して「空也」の名を自称し、四六歳の天曆二年（九四八）に推されて延暦寺で得度受戒して「光勝」の大僧名を与えられ、しかも沙弥の名を改めなかったという。一遍の「持文」であつた空也の詞には、心に所縁なく身に住所なく、忍辱の衣と慈悲の室を体していたとある。^②それは『法華経』の弘経の三軌のうち、空の座は自らの名において体しており、これを放棄することはできないということであろう。彼の写経事業は、叡山受戒の翌々年に始められている。そこで『経』の選択は、仏教の根本智とすべき空・般若への空也の強い信奉を示していると解される。

『願文』は写経供養の目的を、まず「為四恩六道成仏得果」^③と記している。阿弥陀聖の知識勧進に結縁する人々にとって、一切衆生の成仏得果は異議なく共感の得られる願

意であつたらう。しかし願主である空也の思いは、次の「常啼大士之本誓、懸心晨昏、法涌菩薩之対揚、寄思開示」に端的に示されている。次節に見るように、衆生の苦しみを見て常に泣いていた常啼菩薩が、一切有情の生死の苦を度脱させるために悟りを開こうと誓った思いを朝夕に心にかけ、その問いに答えて法涌菩薩が説いた甚深なる般若波羅蜜多を、世の人々に開示解説したいと願っている。それは古来の『経』供養において例のない、真実に経説に即応した願意であつた。

二 『経』と『願文』の主な対応

『経』の卷三九八「常啼菩薩品」は、まず釈尊が「若菩薩摩訶薩欲求般若波羅蜜多。応如常啼菩薩摩訶薩求」として、常啼菩薩の般若の求法の物語を説いており、空中の声が「汝可東行。決定得聞甚深般若波羅蜜多」と教えるのに対して、常啼が「如向所言我当従教。所以者何。我当欲為一切有情作大明故。我当欲集一切如来応正等覺殊勝法故。我当欲証無上正等大菩提故」^③と応え、それはさらに「為欲度脱一切有情生死苦故。勤求無上正等菩提」^④と敷衍されている。これが『願文』にいう「本誓」であり、「対揚」の要点は『経』卷三九九「法涌菩薩品」に説く法涌の教え、「善男子。諸法空性無来無去不可施設。諸法空性即是如来応正等覺。諸法真

『為_二空也上人_一供養金字大般若經願文』再考（石井）

六二

如非合非散。唯有一相所謂無相⁽⁵⁾」である。般若波羅蜜多是法涌菩薩が具妙香城中の般若台の四宝の函に納めて封印してあり、護法の帝釈天も「我等不能輒開相示⁽⁶⁾」であるという。空也はそのような般若波羅蜜多を、供養会を通して世の人々に開示しようと願ったのであった。

書写事業の知識勸進について『願文』は、「市中売_レ身、雖_レ在_二我願_一、人間催_レ信、既寄_二群縁_一。半錢所_レ施、一粒所_レ捨、漸々合_レ力、微々成_レ功」と述べている。『経』では、貧しい常啼が法涌と般若の法に供養すべき財物を持たず、自らの身体を売ってそれを得ようと決意して、市中に「我今自売誰欲買人⁽⁷⁾」と唱え歩く。そして常啼の志を試そうとする帝釈天の求めに応じて自身の血と髓を切り出し、さらに心臓を割こうとするのを見た長者の娘が、五百人の侍女とともに財宝を提供して常啼の命を救い、これに随順して法涌の所に赴く。それは娘等が常啼と共に善根を植え、ともに般若の法を得ようというものであり、市井の空也聖の仏事の範となる結縁の姿であった。さらに『願文』は供養会的情景について、「天人湛_二梅檀水_一」と述べている。これも『経』において、常啼等が法涌菩薩の説法の座を水で清めようとしたところ、悪魔が城中の水をすべて使えなくしてしまったので、自らの身体を切って流出した血を法座に灑いだものを、帝釈天が「変常啼等所出身血一切皆成梅檀香水⁽⁸⁾」と記しているのを受けて

いる。

『願文』撰者の三善道統（生没年不詳）は前年に文章得業生から課試乃第して秀才となっており、後に文章博士・大学頭ともなる文人である。『願文』の中にも彼の学識を示す仏教用語や故事が『大智度論』『高僧伝』その他から多く採られており、中でも「曇無比丘之伝_二法水_一、遍廻_二六度之舟_一」の言葉は、内容的に『経』巻四〇〇「結勸品」の「若菩薩欲学六種波羅蜜多令速円満。応学如是甚深般若波羅蜜多⁽⁹⁾」等に対応しつつ、そこでは鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』『大智度論』等の旧訳における法涌菩薩の表記である曇無竭菩薩の呼称が、一度だけ用いられている。それは、『願文』に通行の駢儷体の対句の修文上の用字で道統の『大智度論』等の学識を示していると同時に、玄奘新訳の『経』説が全体として、空也自らの願意によって『願文』に採り入れられたとする推測を支持していると考えられる。書写事業が一四年の歳月を通して持続されたことも、空也の『経』に対する主体的な強い信奉の念を証している。

三 「願作仏心」における般若と「度衆生心」における念仏

空也による大般若経書写供養は、般若の仏智を人々に開示して衆生を利益しようとする教化であったと同時に、その善

業によって四恩六道の成仏得果を祈願する作善であった。『願文』は「説法之後、更臨^二夜漏^一、設^二万灯会^一、修^二菩薩戒^一、專^二念弥陀^一、永帰^二極樂^一」と述べ、「欲^レ開^二上々之蓮^一」と願っている。つまり知識勸進による書写の事業と供養会の次第は全体として、『観無量寿經』上品上生の三種衆生、「一者慈心不^レ殺具^二諸戒行^一。二者誦^二誦大乘方等經典^一。三者修^二行六念^一。廻向發^二願生^二彼仏国^一」⁽¹⁰⁾の要件を満足すべく周到に設定され、その中で結縁の人々はおのずから念仏・法・僧・戒・施・天の六念を修し、その功德を廻向して共に上品上生の往生を果たそうという發願に結集されている。

『空也上人誄』が記すように、天慶元年(九三八)に平安京に還った三六歳の空也は、東市の中で「尋常時、称^二南無阿弥陀仏^一、間不^レ容^レ髮^一」であり、その没後に『拾遺抄』に拾遺された当時の彼の道歌は、「一たびも南無阿弥陀仏という人の蓮の上にのぼらぬはなし」と、一念往生の確信を歌っている。それは後に虎関師鍊(一二七八—一三四六)が『元亨釈書』で評するように、「猶導之於唐(なお善導の唐におけるがごとし)」という易行往生の念仏行であった。その空也が晩年の大般若經供養会で、右のような修諸功德の勸進と上品上生往生の廻向を行ったことの意味を、一体どのように解すべきであろうか。

『經』において、常啼は「為欲度脱一切有情生死苦故。勤

求無上正等菩提」であったという。これに対する法涌の教えは、「諸法空性無来無去不可施設。唯有一相所謂無相」というもので、この空の悟りを説くことだけによって一切有情を生死の苦から直接に度脱させることは、現実にはまず不可能であろう。空也も常啼と同じ目的をもって、自らには般若・空の悟りを求めた。しかし同時に、彼は優婆塞の若年時代に見聞した庶民生活の実態をふまえて、一切有情を生死の苦悩から度脱させる実効ある教えとして、念仏往生の易行の方便を選びとった。それを彼は、尾張国分寺出家のあと数年間籠山した播磨峯合寺の一切経蔵で学びとったと考えられ、それは善導の『往生礼懺偈』・飛錫の『念仏三昧宝王論』の学習によるものであることが、一遍所持の「空也の文」から明らかに推定される。

つまり、沙弥出家の時から空・般若の仏智を求索した空也の願作仏心は、それと表裏一体の関係にある度衆生心において、空也に、世親が『往生論』に説く「智慧慈悲方便三種門。撰^二取般若^一。般若撰^二取方便^一」⁽¹¹⁾の論理と、「欲^レ拔^二一切衆生苦^一故。作^下願撰^二取一切衆生^一。共生^中彼安樂仏国^上」⁽¹²⁾の善巧方便に契合する求道の思索によって、極樂往生の念仏を選択させた。しかし飛錫が説くような、「一念善業成。即登^二極樂^一。豈要^レ至^二十念^一哉」⁽¹³⁾という究極の易行口称の念仏は、空也の確信でもあったにせよ、当時の日本仏教では評価に値

『為_二空也上人_一供養金字大般若經願文』再考（石井）

六四

しない、あまりにも疎雑な行と見られたのであろう。供養会の二二年後に書かれた源信の『往生要集』でも、「余人十念定得_二往生_一」、逆者一念定不_レ能_レ生_{（14）}」と悪人の一念往生が否定され、二四二年も後の時代にすら、貞慶が『興福寺奏狀』で指弾しているように、「口唱_二名号_一、不_レ觀不_レ定、是念仏之中麁也浅也_{（15）}」とするのが、正統の仏教と主張されたのである。一〇世紀半ばの市中の聖である空也が、念仏往生の福音を人々に広く納得させるためには、やはり修諸功德の作善が必要であった。

『願文』の中で空也は自らも老境に達し、「意蕊發露、無上之果欲_レ求_レ」としながら、「以_二先_レ彼後_レ我之思_一為_レ思、以_二利他忘_レ己之情_一為_レ情」の菩提心に導びかれて、この経供養を遂げることができたと述懐している。ここで自他に欲求された「無上之果」は、曇鸞のいう「畢竟成仏道路無上方便_{（16）}」であり、空也においてそれは般若波羅蜜多の無上正覺と等しい仏の済度の世界であったと考えられる。結果、空也は善導が随縁起行の「有縁之行_{（17）}」とする修諸功德の大般若経供養会の作善によって、平安京の人々に極樂往生という畢竟成仏の道を廻向しようとしたのであった。

- 1 大七・八七三下
- 2 『二遍聖絵』第四

- 3 大六・一〇五九下
 - 4 同 一〇六四上
 - 5 同 一〇六七下—一〇六八上
 - 6 同 一〇六六上
 - 7 同 一〇六二下
 - 8 同 一〇七一上
 - 9 同 一〇七三上
 - 10 大一二・三四四下
 - 11 大二六・二三二下
 - 12 同
 - 13 飛錫『念仏三昧宝王論』大四七・一三八下
 - 14 大八四・八四下
 - 15 『鎌倉旧仏教 続・日本仏教の思想3』（岩波書店）三三四頁下
 - 16 曇鸞『往生論註』大四〇・八四二中
 - 17 善導『觀無量寿仏経疏』大三七・二七二下
- 〈キーワード〉 大般若波羅蜜多經、空也、念仏往生、為空也上人
供養金字大般若経願文
(東洋大学大学院修了)